別記様式第３号

学　位　論　文　要　旨

氏　名　妹尾　藍

題　目　色彩の感受に基づく表現が新しい価値に向かう態度に与える影響の研究

本研究の問題意識は，筆者の所属校での生徒の学習活動中に，名詞を使った客観的な情報の羅列のみで対話がなされ，Huntが述べた学習への内発的動機付けを促す「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」が並列な関係として存在するという主張とは相反した状況だったことを発端としている。つまり，社会生活を送る上で生徒自身が知覚したことを，自分の意見として表出しにくいことを問題とした。

この問題に対して，本研究において二つの課題を追究することとした。一つ目の「課題①」は，「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の視座からの造形行為を行うようになる学習プログラムの開発とその検討を行うことである。二つ目は，「課題②」として，開発したプログラムによって，生徒が新しい価値に向かう態度が高まっているかを測る尺度の開発とその検証を行うことである。

第１章では，本研究の課題を達成するために必要となる色彩の感受と創造性に関する先行研究から，本研究の位置づけを行う。

第２章では，絵画鑑賞で「知覚と環境の相互作用」を促す色彩からの感受に重きを置いた色彩感情効果学習を行い，絵画作品の主題に関する記述の語句の種類と数を集計した。その結果，色彩の感受を繰り返す学習活動には，「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の二つの視座から，絵画鑑賞をするようになる効果があることが分かった。

第３章では，色彩の感受に重きを置いた学習プログラムが，表現活動においても有効であるのかの調査を行った。その結果，色彩の感受による学習によって，「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の両方を基にした表現主題に向かう態度が培われ，且つその態度が一定期間持続する効果があることが分かった。

第4章では，「知覚と環境の相互作用」だけでなく，色彩についての知識を習得する「情報処理と行為」に基づく学習が造形行為に与える影響について二つの調査を行った。一つ目の調査（以下，調査aと表記）は，生徒が色彩の感受もしくは色彩の知識習得だけを経験する影響を検討する。調査aの結果から，色彩の感受のメリットは，表現主題から多くのことを想像し，多様な表現に向かう姿勢を強める効果があることで，デメリットは，自分の感覚とはそぐわない色は使わないままになることである。色彩の知識習得のメリットは，知識を活用して多くの色数を用いて表現する効果があることで，デメリットは，想像することから

の作品の表現主題が弱くなることである。

二つ目の調査（以下，調査bと表記）では，二つの学習の順序性が与える影響を検討する。その結果，色彩の感受から経験することは「知覚と環境の相互作用」を行い，多くのことを想像し，「情報処理と行為」を行って様々な色や技法を用いて表現に向かう姿勢を高める効果があることと，二つの学習プログラムのデメリットを補うことが分かった。

第5章では，視覚のみの学習プログラムと，視覚以外の感覚を相互作用させて色彩を感受する学習プログラムを実施し，生徒の制作状況を調査する。その結果，相互作用させるために視覚以外の感覚を加えた学習プログラムでは，触覚，聴覚，嗅覚に応じて想像する内容が多様に変化するようになり，言葉ではなく，造形で表す姿勢を高める効果があることが分かった。

第6章では，個人にとっての新しい価値に向かう「mini-c」が培われているのかを検証する尺度を作成し，地域が異なる複数の中学校でのアンケートを実施した。そして，アンケートの調査結果とカリキュラムとの関係を検討し，作成した尺度の妥当性を検証した結果，妥当性が確認できた。

第7章では，創造的態度尺度と生徒の作品の制作状況との相関性を調査した。その結果，色彩の感受に重きを置く学習プログラムを繰り返し経験すれば，「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の両方を意識して表現されるとともに，新しい価値に向かう態度も強まるようになる傾向が見られることと，自分にとっての美しさを求めることで，新しい価値に向かう態度を自身で育てやすくなることが分かった。

以上の調査を踏まえ，課題①と課題②に呼応する以下の2点の効果があることを確認し，本研究の結論とする。

①「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の両方の視座を持って表現活動，鑑賞活動に向かうように育むための一つの方法として，色彩の感受が有効である

②色彩に関する本学習プログラムを経験し，かつ，自分にとっての美しさを求める生徒ならば，新しい価値へ向かう態度を強める効果がある